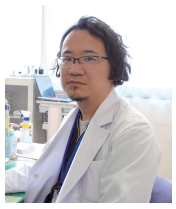
経口抗ウイルス薬が新型コロナ感染症罹患後症状発生リスク低下などに関連

日比野・湘南大磯病院副院長が2論文発表

徳洲会グループが実施する研究により、経口抗ウイルス薬の使用が新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の罹患後症状（Long COVID）の発生リスク低下や早期回復と関連することを見出し、研究代表医師である湘南大磯病院（神奈川県）の日比野真・副院長兼呼吸器内科部長が、その成果をふたつの原著論文として国際的な学術誌に発表した。同研究は、全国の徳洲会グループ病院が参加した大規模前向き観察研究「ANCHOR 試験」による成果で、2024 年 2 月 1 日から 10 月 31 日までに登録された約 9,000 例を対象に検証した。

全国の徳洲会病院参画による大規模研究

論文は米国医師会（AMA）が発行するオープンアクセス医学誌『JAMA Network Open』と、国際感染症学会（ISID）の公式学術誌『International Journal of Infectious Diseases（IJID）』に掲載。研究の名称は「ANCHOR 試験」で、全国の徳洲会グループ病院が参加した大規模な臨床レジストリ研究だ。



「徳洲会のスケールメリットがあったからこそ実現できました」と日比野副院長

『JAMA Network Open』に掲載された論文は、「ANCHOR-01」研究をベースにしたもので、タイトルは「Early-Phase Oral Antiviral Use and Post-COVID-19 Condition in Outpatients」（COVID-19 外来患者における早期経口抗ウイルス薬の使用と罹患後症状）。発症 5 日以内の COVID-19 外来患者さん 7,699 人を対象に、早期の抗ウイルス薬投与が罹患後症状の発生率に与える影響を評価した。

解析の結果、抗ウイルス薬（エンシトレルビル、ニルマトレルビル、モルヌピラビル）を投与した群では、非投与群と比較して罹患後症状（28 日後および 84 日後の両時点で症状が持続している）のリスクが有意に低く、抗ウイルス薬の使用と Long COVID リスク低下との関連が示された（調整リスク比 0.86）。とくに、新型コロナに特徴的な嗅覚障害や味覚障害では、症状が持続するリスクが大幅に低かった。

一方、『IJID』に掲載された論文は「ANCHOR-02」研究をベースにしたもので、タイトルは「Impact of early oral antiviral use for outpatients with COVID-19 on healthcare utilization and recovery」（COVID-19 外来患者における早期経口抗ウイルス薬の使用が医療利用および回復に与える影響）。同じく発症 5 日以内の COVID-19 外来患者さん 8,039 人を対象に、発症から 28 日目までの臨床的・機能的回復や医療利用の状況を検討した。

抗ウイルス薬の投与群は非投与群と比べ、「元の健康状態に戻っていない」と回答した割合が有意に低く（調整リスク比 0.76）、プレゼンティーイズム（健康問題を抱えたまま出勤し、生産性が落ちている状態）や日常活動の障害度でも改善を確認。また、予定外の再受診率でも数値上の低下傾向を示した。

世界的な関心の高さ実感 スケールメリット成果に

『JAMA Network Open』はインパクトファクターが約 10 の国際的に評価の高い雑誌であり、研究成果は海外からも反響を得た。

日比野副院長は「投稿当初は、いくつかの国際医学誌で査読に進まないことが続き、正直なところ COVID-19 や Long COVID というテーマへの関心は、すでに薄れているのではないかと感じた時期もありました。それだけに、掲載後、スペインの医師から同誌上にコメントが寄せられ、私たちも著者として回答する機会を得たことは印象的でした。また、米国の薬剤師向けメディア『Pharmacy Times』からも取材を受け、研究成果が海外でも関心をもって受け止められていることを実感しました」と振り返る。

全国スケールでの取り組みがもたらした成果に関し、「この研究は、国際的には使用経験がまだ限られている薬も含め、実際の臨床データを検証したものであり、徳洲会という全国規模のスケールメリットがあったからこそ実現できた非常に貴重な研究です。ご協力いただいたグループ病院の皆さまには大変感謝しています」と謝意を表明。

さらに、症例集積をはじめ研究に大きく貢献したグループ内の医師らが著者として参画していることにも触れ、「今回の研究成果が、各病院における学術活動や評価の向上にもつながればと考えています」と語った。

ANCHOR 試験はこれで終了ではなく、現在は「ANCHOR-03」へと移行。これまでの 01 や 02 は、重症化リスクの有無にかかわらず、幅広い患者さんを対象としていたが、03 では、高齢者や糖尿病、がんなどの重症化リスクを有する患者さんを対象とし、抗ウイルス薬の使用が入院や死亡といった重篤なアウトカムの減少と関連するかを検証する。

現在は 1 万 500 人ほどのデータが集まっており、1 万 1,000 人の登録目標の達成まであとわずか。患者登録は 26 年 10 月末で終了する予定で、日比野副院長は「最後までグループ一丸となってデータを収集し、さらなる学術的成果として発信していきたいです」と意欲を見せる。

今回のふたつの原著論文の掲載は、徳洲会グループが有する大規模な臨床データを活用できる研究基盤と、グループ全体の連携による学術研究推進力を国内外に強く示すものとなった。

世界的に Long COVID の克服が課題となるなか、日本の日常診療から得られた今回のエビデンスは、今後の新型コロナ治療戦略を考えるうえで重要な知見となる。徳洲会グループは今後も、臨床現場の疑問を解き明かす質の高い研究活動を継続し、医療の発展と社会への貢献を目指す。

湘南鎌倉病院の腎臓病教室 130人が参加し質疑活発



「皆さんが楽しく充実した毎日を過ごすことに寄り添えたら」と日髙センター長

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は8月8日、一般の方を対象に第3回湘南鎌倉腎臓病教室「腎臓を守る運動習慣～今日からできる健康づくり～」を開いた。医師や看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士がそれぞれ講演、前年を大きく上回る130人が参加した。

開会挨拶で小峯優花看護師は、自分の腎機能を正しく知り運動を習慣付けるよう呼びかけた。続いて岩村直樹・腎不全看護認定看護師が血液・尿検査による早期発見、山口菜摘薬剤師が市販の痛み止めなどには腎臓に負担をかける可能性があるなど注意点を解説。古旗省吾・栄養管理部係長はタンパク質など主要な栄養を毎日均等に摂ることの大切さを説き、甲斐さくら理学療法士は自宅でできる運動を実演した。

日髙寿美・腎臓病総合医療センター長は、生活習慣を土台に新しい薬を組み合わせ透析への進行を遅らせる最新治療を紹介した。

質疑応答では、適切な運動量や飲水量などについて、参加者から多くの質問が出た。同院が6月に発表した国内初となる遺伝子改変ブタ腎移植の治験に関する問いもあり、関心の高さがうかがえた。日髙センター長は「当院は腎臓治療にチームで臨んでいます。皆さんが楽しく充実した毎日を過ごすことに寄り添えたら幸いです」と締めくくった。

CTGテーマに周産期セミナーを初開催



医師や助産師ら約30人が参加し周産期医療の実践力向上へ

湘南鎌倉総合病院は7月2日、職員の周産期教育の強化を目的に、「湘南鎌倉周産期セミナー」を初開催した。外部講師として招聘した高江正道・聖マリアンナ医科大学産婦人科教授が、「CTG（胎児心拍数陣痛図）の読み方」をテーマに講演。医師や助産師ら約30人が参加し、周産期医療の実践力向上のため研鑽を積んだ。

小林陽一・産婦人科統括部長は開催の背景について、「分娩は無事に生まれて当たり前の世界ですが、時に予期せぬ事態が起こり得ます。また、当院では助産師が、妊婦さんに理想の分娩像を提供することを目標としていますが、その大前提として、エビデンスに基づいた安全性の確保が必要です。当院で問題症例を経験したことを契機に、助産師全員の意識や知識の向上、モニターを理解する個々の能力の均霑化を目指して企画しました」と明かす。

講演後には活発な質疑応答があり、参加者からは「事例が詳細でわかりやすく、基本を再確認できた」など好評だった。小林・統括部長は「今後も教育効果を見ながら定期開催し、当院の自験例の解析をさらに深めていきたい」と意欲的だ。

徳洲会3病院の脳卒中診療体制

ウズベキスタン視察団が見聞

湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）、千葉西総合病院、鎌ケ谷総合病院（千葉県）は8月18日と20日、ウズベキスタン共和国の首都タシケント市に建設を予定している脳神経脳卒中センターの関係者ら10人の視察団を受け入れた。



湘南藤沢病院でリハビリテーション室を見学する視察団

視察は同センターの院長候補で、アカデミシャン・トゥラクロフ記念共和国国立内分泌専門科学実践医療センターのアブドゥファルフ・カリモフ脳神経科部長らが、主に急性期から回復期まで脳卒中の診療体制を見聞するのが目的。



千葉西病院のヘリポートを視察

湘南藤沢病院では18日、外来やER（救急外来）、ICU（集中治療室）、リハビリテーション部門などを回り、江原宗平院長の脊椎外科手術も見学した。20日午前に訪れた千葉西病院では、吉田博章・事務部長が案内し、同院の特色であるカテーテルスタジオなどを視察。熊井潤一郎・副院長兼脳神経外科主任部長が質疑に応じた。



記念品を贈り合う（右から）カリモフ部長、鎌ケ谷病院の兵頭センター長、杉本部長

同日午後に訪れた鎌ケ谷病院では、青木俊彦事務長が自院の基本情報を説明、兵頭明夫・脳血管内治療センター長、杉本耕一・脳神経外科・回復期リハビリテーション科部長、河村洋介・脳血管内治療センター部長らが、脳卒中に対する取り組みを紹介した。河村部長が執刀のくも膜下出血の手術や、リハビリテーション病棟なども見学した。

カリモフ部長は「徳洲会の病院を訪れ、深く感銘を受けました。手術室の設備や動線がとくに参考になり、どの病院もロジスティックスや運営が優れていると感じました」と笑みを浮かべていた。

医療法人徳洲会は、ウズベキスタンのナマンガン州と医療分野での協力に関する覚書（MOU）を締結している。

“懐メロ”に心弾む！

武蔵野徳洲苑が演奏会



懐メロを楽しむ利用者さんと、会場を盛り上げるフォーク歌手の和さん

介護老人保健施設武蔵野徳洲苑（東京都）は 8 月 23 日、ボランティアによるフォークソングの演奏会を開いた。

演奏会では、コミュニティ FM 放送局「FM 西東京」でレギュラー番組をもつユニット「なごえり」が懐メロを披露。なごえりは、弾き語りのフォーク歌手、和（なごみ） さんと、MC の高橋絵里さんによるユニットで、隣接する武蔵野徳洲会病院で 6 月に開かれた「むさとくフェスティバル」で司会を務めた縁から、今回のボランティア演奏会が実現した。

演奏は各フロアーで約 30 分ずつ演奏、計 141 人の利用者さんに『あの素晴らしい愛をもう一度』、『上を向いて歩こう』など懐かしの名曲を披露した。同施設の田渕一郎事務長は「ふだんは感情をあまり顔に出さない方が、涙を流しながら手拍子され、とても印象的でした」と感慨深げ。

WEB医療講演スケジュール

Facebook で公開中！

徳洲会グループ病院では、さまざまなテーマで医療講演を開催している。オンラインで受講可能な講演を徳洲会グループの Facebook で公開中。当該病院のホームページで参加方法などを要チェック！